祖父と父から学んだ農業。「人とのつながり」を大切にしたい。

鈴木（すずき） 佐紀人（さきと）さん

（高岡／36歳）

農業は日常の一部でした

「まだまだ勉強中です」。そう話すのは、市内・高岡地区の実家で父・利一（としいち）さんとともに農家を営む鈴木佐紀人（すずきさきと）さん。幼少の頃から農業は身近だったといいます。高校、大学時代は、祖父・紀夫（のりお）さんの農業の手伝いをすることもあったそうで「農業をする祖父や父の背中を見て育ちました」と話します。

本格的に実家で農業をやるようになったのは2年ほど前から。紀夫さんが4年前に他界し、今は利一さんと2人で、米作を中心にネギ、ブロッコリー、キャベツ、トウモロコシなどをつくっています。

「祖父が使っていた農業機械はいまも現役。米づくりやネギの栽培に関しても、まだまだ父から学ぶことが多くて。2人には感謝しています」。

新鮮さへのこだわり

鈴木さんは野菜を栽培する際は「農薬の使用をできるだけ抑えている」といいます。実際に、自身が栽培するパクチーやオクラ、ジャガイモは、栽培する期間中は農薬は使わずに栽培しているとのこと。「少し虫がついても、まずは数株引き抜いて様子を見たり、虫を探し出して取り除いています」。

野菜の収穫のタイミングにもこだわりが。なるべく新鮮なものを食べてもらいたいとのことで「極力、その日の朝収穫するようにしています」。朝収穫した野菜は、市内スーパーの地元野菜コーナーに自ら並べていきます。並べたそばからお客さんが買っていくこともあり、食べ方の話題で会話が生まれることもあるとか。

土づくりに関しても、土を元気にし、肥料の持ちを良くするため「今後は堆肥などの有機質肥料を取り入れていきたい」と話します。

農業を通じた食育も

「人とつながることができるのも農業の魅力だと思います」。鈴木さんは新たな取り組みとして、地域の子どもたちに農業体験をしてもらう取り組みを始めています。田んぼで鎌を使った稲刈りをしたり、精米したての新米でおにぎりをつくったり、野菜を収穫したりと、内容はさまざま。「普段野菜を食べない子が食べられたり、良い反響がありました。これからも続けていきたいですね」と笑顔で話してくれました。

①

②

①：鈴木さんの田んぼで穫れたコシヒカリ。②：地域の子どもたちと一緒に稲刈り。利一さんとともに鎌の使い方を教える佐紀人さん